

ピアノ：梶岡 肇（かじおか はじめ）

高校教諭、日本アマチュア演奏家協会（APA）関西支部理事。全くのアマチュアですが、ピアノを通じて多くの方々と音楽の素晴らしさを共有したいという気持ちで、拙い演奏ではありますが活動を続けております。主な活動拠点はAPAという室内楽中心の組織です。興味のある方はウェブサイトをご覧ください。

<http://www.apa-music.org/>

アンサンブル・フロイントとはここ数年いろいろなピアノ協奏曲を合わせていただいています。本物のオーケストラと共演するという貴重な経験をさせていただき感謝しております。本日は会場にお越し下さった皆さんと一緒に楽しい時間を過ごしたいと思います。

指揮：小西 収（こにし しゅう）

1965年生まれ。高等学校数学科教員。1987、88年に大阪市立大学交響楽団学生指揮者としてシベリウス第2、ブラームス第2・第4、チャイコフスキー第5の4交響曲を演奏。



音楽に関しては高校時代より独学の道を行ってきたが、2001～2003にわたって小林研一郎指揮法セミナーに参加。2002年（女満別）の関連コンサートでは、受講生たちが『運命』冒頭しばらくを指揮するコーナーにおいて「爪を隠し」無理をして普段の自分と正反対の正統的解釈（運運動機をスタッカートで強奏など）で指揮、炎のコパケンに「（3つめの）フェルマータ直前の切迫感はずばらしい」と誉められ、また「そこだともう遅い」と叱られる。「出て来方、歩き方からもっと堂々と、例えば後ろ歩きなど練習するとよい」と言われ、出番交替時に舞台から後ろ歩きで引っ込み、地元聴衆の笑いをとる。2003年（愛知県知立市）には、マエストロ小林に「朝比奈隆みたいな遅いテンポはもう古い」「朝比奈先生、の師匠…そう、近衛秀麿に似ている」と言われ、また最終日の朝食場ではすれ違いざまに「やあ、きみはフルトヴェングラーみたいだったなあ」と愉快そうに言葉をかけられた。後日、近衛指揮のCD・DVDを視聴して、近衛と自分の共通性および小林先生のその指摘の鋭さの両方に驚くことになる。時代がかった指揮に呆れられながらも、先生ご自身の大先輩となる巨匠たちになぞらえてもらえたことには大いに気をよくする。

2007年には奈良県の橿原交響楽団の客演指揮者に迎えられ、6月には「木星」「モルダウ」ほかを、11月にはドビュッシー「小組曲」、シューベルト「グレート」を演奏。

2008年3月にはFM大阪のラジオ番組「宇野功芳の音楽夜話」にゲスト出演、高校時代からの心の師の一人である音楽評論家・指揮者の宇野功芳氏と4回にわたる対談を果たし、ブルーノ・ワルターや松村禎三について語る。また、アンサンブル・フロイントについても紹介され、シューマン第2、「グレート」の演奏が放送される。

## ロベルト・シューマン / ピアノ協奏曲イ短調作品54

**第1楽章：**全強奏とピアノによる稲妻のような楽句で開始される。オーボエを中心に奏でられる第1主題は、短調のロマン的旋律の一つの典型であろう。一度聞いたら忘れない印象を与える。独奏ピアノがそれを繰り返した後、おごそかに弦合奏が旋律を受け継いで行く。楽章全体を通じて、短調のロマン性・ドラマ性がこれほど結晶した例は他にないのではない。その白眉はシューマン自身によるカデンツァであろう。

『ウルトラセブン』最終話でこの楽章が用いられていることは有名だが、特にカデンツァ以降終結まではノーカットで流れ、明らかに音楽の方に沿った形で映像演出が為されているように見える。「この曲の使用は初め予定外だった」という監督の逸話も思い出すと、「意図」や「思い」の及ばぬ所にこそ作品の普遍性・芸術表現の可能性すなわち「感動の源」は存在するということなのだろう。

**第2楽章：**劇的な第1楽章を受けるにふさわしい、実に慈しみのある静かな間奏曲。移行部を挟んで、切れ目なく第3楽章へとつながる。

**第3楽章：**4分の3拍子の拍節感を直接出して行くシンプルな力強さを持つ冒頭他の部分と、一つの音型・動機を元にしてそれをヘミオラとしても本来のシンコペーションとしても出して行く複雑で細やかな味わいを持つ部分が交代で現れる。それぞれが、シューマンならではの運動的で美しい楽想に満ちている。終結部に至ってもなお、独奏ピアノを中心に新たな主題が次々と現れ、そのいずれもが、このまま速いテンポで過ぎ去るには何とも惜しいほどの旋律美を持っている。それらをもれなく聴き取るよう努めることは、他にない楽しい鑑賞体験となろう。

## ロベルト・シューマン / 交響曲第3番変ホ長調作品97「ライン」

「ライン」と呼ばれるようになったのは作曲家の没後だという。作曲時代にシューマンがラインラント州のデュッセルドルフで過ごしたことと、その時期が作曲家の人生の中でも最も幸福な時期であると伝えられ、その気分がこの曲の様々な楽想に反映されているように受け取れること、などが理由に挙げられる。が、この呼称が優れているのは、作曲者の伝記的な背景について知らずとも、この曲の特に前半2つの楽章の特徴をみごとに掴んでいる点にこそある。

実際、第1楽章は、川の水が流れるがごとく、魅力的な楽想がその動きを止めることなく絶えず次々と繰り出されて進んでいき、第2楽章の穏やかなレントラー（オーストリア～南ドイツの舞曲）は、風光明媚な川辺の風景をのんびりと眺めるような愉しみに満ちている。目に映り耳に聞こえた自然を、描写とは異なる交響楽の語法に依りながら、作曲行為というプリズムを通してみごとにくっきりと投影し返したといえる。そしてどちらの楽章にも織り込まれる並行短調の第2主題によって、それらの自然に包まれつつも、ときに両目に溢れる悲しみの涙を溜めたままそれらを見つめて立つ人間自身の素顔の表情をも表現し得ている。

第3楽章では、静かで平穏な第1主題と、微風に木の葉が揺れるような、長調とも短調ともつかぬ第2主題とが淡いコントラストを成す。そして、交響曲としては異例の、短いながらも荘重な間奏曲（第4楽章）を挟んだ後、明るく軽く勢いのあるフィナーレが置かれる。しかし、その冒頭には「Lebhaft = 活発に」と「dolce」とが併記されていたり、ソナタ形式の2つの主題や副主題が明確なコントラストを持たずにむしろ類似していたりと、フィナーレは何かしら曖昧な性格を持って進行して行く。その中で、展開部後半に突如現れる新しい印象的なアルペジオ主題は、第1楽章をふと思い出させる雰囲気も持ち、短い時間に豊かな要素を盛り込んだこの交響曲全体が、雑然としたものではなくまとまった魅力のある作品として改めて聞き取れるような、いわば「締め」の旋律になっている。

〈小西 収〉

9<sup>th</sup> concert  
Ensemble Freund

2009年2月1日（日） 豊中市立アクア文化ホール

アンサンブル・フロイント 第9回演奏会





## 身体 の 記憶

アンサンブル・フロイント・マネージャー  
大石 聡

ロベルト・シューマン  
Robert Schumann  
ピアノ協奏曲イ短調作品54  
Klavierkonzert A-moll Op.54

第1楽章 Allegro affettuoso  
第2楽章 間奏曲 (Intermezzo): Adagio  
第3楽章 フィナーレ (Finale): Alla breve

\*\*\* 休憩 (15分) \*\*\*

ロベルト・シューマン  
Robert Schumann  
交響曲第3番変ホ長調作品97「ライン」  
Symphonie Nr. 3 Es-Dur Op. 97 "Rheinische"

第1楽章 生き生きと (Lebhaft)  
第2楽章 スケルツォ きわめて中庸に (Sehr mäßig)  
第3楽章 速くなく (Nicht schnell)  
第4楽章 荘厳に (Feierlich)  
第5楽章 フィナーレ 生き生きと (Lebhaft)

■ ピアノ：梶岡 肇

■ 管弦楽：アンサンブル・フロイント

■ 指揮：小西 収



引っ越しをすることになり、押入の整理をしていると大量の古いカセットテープが出てきた。ラジカセを持ち出してきて聞いてみようとしたが、劣化したテープが粘着していて、多くが聴取できない状態だった。何度か巻き戻したり早送りしたりしてやるうちに、あるテープから不意に音楽が流れ出てきた。チャイコフスキーの一番交響曲の第3楽章、木管楽器のトリルと、弦楽器の軽やかなピッツィカート。陰影のある、何処か懐かしい旋律が奏でられている。一瞬にして私は、もう20年ほども遠くなった、演奏をしていた「その瞬間」に引き戻されていた。驚いたことに、オーボエの旋律の合間の何処で息を継ぎ、どのタイミングでどの奏者をチラッと見つめシンクロしていたか、といったことまで、異様なまでにありありと記憶が蘇ってきた。その記憶はどうか頭の中ではなく、体が記憶しているようでもあり、目を閉じると「体の動き」としてその全てが再現できるような気がした。すごい、と私は思った。

初期の頃の臓器移植手術を扱った文献を読んでいると、臓器の移植を受けた人間に、覚えのない記憶の再現現象がみられるという報告にしばしば出くわす。心臓移植を受けた人が退院後「バイクで転倒する夢」を繰り返し見るようになる。だが被移植者は、バイクはおろか、自転車にさえ乗った経験がないのである。しかし、夢には実感があり、伝わってくるバイクのエンジンの鼓動までが、不思議と深い馴染みを感じさせる。そして、転倒シーン。回転してゆくその風景の中に、印象的な赤い屋根の小屋が出てくる。不思議さを抑えかねた被移植者がそのことを医師に相談し、医師も驚いて記録を辿ってみると、移植手術に用いた心臓の提供者は、バイクの事故で脳死状態になった後に亡くなっていたことが判明する。警察に残されていた事故記録を頼りに被提供者が事故現場を訪れてみると、そこに夢の中で見た「あの赤屋根の小屋」が実在している。そういう類の、不思議な話だ。

記憶は神経ネットワークの中に存在している。しかし、それが本当は「どのように」存在しているのかについて、正確に述べるができる脳生理学者はいない。わかったようなことを言う人が居たら、そいつは詐欺師か二流の学者だと思った方がよい。一流の脳研究者ほど、エビデンスの明らかな科学研究からわかる脳の機能は「ほんの少し」でしかないことを知っている。神経ネットワークは脳にだけ存在するわけではなく、体の隅々まで末梢神経が存在するわけで、それらがどのように関与しているのかは正確にはわからない。だから、臓器移植によって

ネットワークの構成が変わると、中枢自体の働きが何らかの影響を蒙っても全然不思議ではないのである。体が記憶している、ということに実感を覚える人は多いだろう。芸術に限らず、技術者の熟練した技の殆どは「意図してやること」ではなく、体が覚えているとおり無意識で行われるものである。オーケストラ奏者の体験がそうであっても、何の不思議もない。

オーケストラに人間が集い・演奏するという行為は、高度に「意識的」かつ「知的」な行為であるようでいて、ただそれだけではないのだ。私は、大学のオーケストラでその行為と快樂に出逢った。それを繰り返し味わいたくて、私はその後幾つかの市民オーケストラを渡り歩いた末に、フロイントというオーケストラの創成に立ち会い、その成長に接してきた。私は、私が何故そのような行為を行い、私が何を求めているのかについて、その都度真剣に考えてきた。しかし、そうした過程で考えてきた「意識的」で「知的」なことは、今ではもうすっかり時間の流れの中に消え去ってしまっている。文字に残されているものを見ても、さしたる感興が湧くわけではない。そのどれもがフロイントに関連しつつ、その本質からは「遠い」ものだからだ。そんなものとは何の関係なく、今日もフロイントは質の高い音楽体験を産み出し続けているのだ。

だが、フロイントを離れた今でも、フロイントに参加していた頃の「体の記憶」だけは、まったく色褪せることがなく私の中に確実に残されている。私とその音楽に接するたびに、その記憶は私の身体の奥底から湧き上がる。異様にリアリティのある、その感情や感覚の集成体こそが、確かにその時の「フロイントそのもの」だった。そこには頭で考えられたような「理想」や「原理」といった虚偽が入り込む余地はない。私にとってフロイントとは、その「身体の記憶」そのもののことである。そこで私は、身体を通して確かに「フロイントの全ての人間」と分かちがたく結びついていた。そして、小西収という特別な指揮者との濃厚なコミュニケーションを通して、その曲を作曲した人間とも、私はとても深いところで激しく「交感」したのだった。音楽は、そのようにして「私のもの」となり、私という存在と不可分に結びついているのである。

音楽を「聴く」という行為と、音楽演奏に「参加する」という体験は、その「身体的記憶」の有り様に於いて本質的に異なっているような気がする。今日もまた、フロイントのメンバー達は、あの舞台の上で聴衆の皆を巻き込みつつ、ただ一度限りの激しく深い「交感」を行い、それぞれの身体に深く記憶を染みこませることだろう。そのようなことが生成している「神聖な場」として、フロイントの舞台を眺めてみるのも一興なのではないだろうか。シューマンの音楽との掛け替えのない「出会い」の体験が、聴衆であるあなたの身体にも伝わりますように。